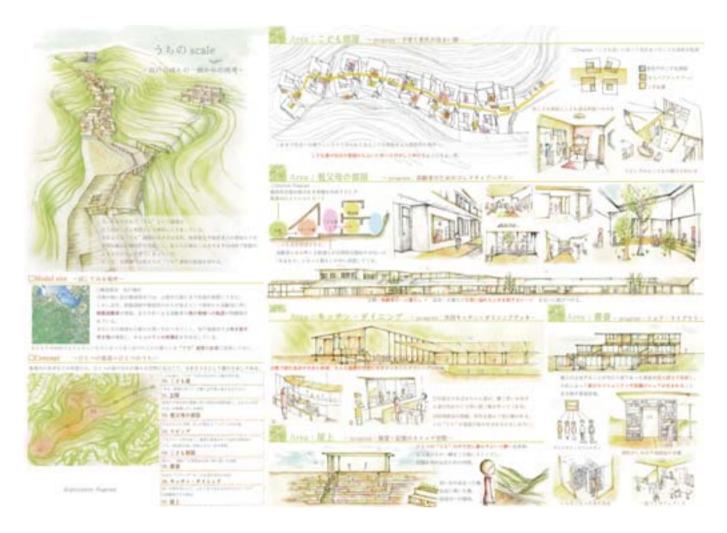


## うちのscale 谷戸のほんの一画からの再考



今井沙耶(いまいさや) 千葉大学 工学部 建築学科

JIA全国出品作品



今、私たちがもつ"うち"という感覚は、ひと住戸・ひと家族という単位に とどまっている。そのような"うち"感覚の小ささは近年、核家族化や独居老 人の増加など生活単位縮小の傾向を引き起こし、私たちの暮らしはますます内 向的で制限のあるものとなってきてしまっている。そこで、本提案では私たち の"うち"感覚の拡張を試みる。

横須賀市谷戸地区内の"ひとつの集落"を"ひとつのうち"として再構築。 集落内の各所を、従来よりもスケールを拡大した住まいの中のひとつひとつの 諸室に見立てて多世帯で共有する暮らしの空間を計画する。それによって人々 の日常がささやかでも確かな変化を起こし、暮らしがよりおおらかで多彩なも のとなることを期待する。





## 講評

作者が提案する、共助関係によって成立する地域生活像は、 旧来のコミュニタリアンの論調にほぼ一致したものだ。したが って、たとえば地域規範を阻害する者に対する排除意識などと いった、共同体主義特有の欠点を伴ったコミュニティ像である ことは否めない。にもかかわらず本作が魅力的なのは、この閉 塞的な集落の、ややもすると短所となり得る地形的特徴を、作 者の主観を通して長所に変換してみせた点にある。主観といっ ても、決して独りよがりなものではない。先人の論考を参照す るなら、槇文彦らが30年あまり前に提示した、微地形のもつ 都市的文脈の読解手法に近い。槇はそれを「奥の思想」と名付 けた。対して本作を「うちの思想」と呼んでもよかろう。集落 地形と集落居住者の生活感覚をひとつの思想で重ね合わせよう としたこの試みは、実に有意義な思考実験となった。空間設計 手法は正当、プレゼンテーションボードは綿密、公開審査での 口演や質疑応答も誠実で、総合的にみて完成度の高い作品であ る。欲を言えば、模型にもこの思想を表現する工夫があるとよ かった。

(審査委員: 矢野 裕之)